

[研究ノート]

成人期に発達障害を告知されたケースのライフステージからの検討

—語りと手記から社会性の獲得を考える—

水間 宗幸¹

【要旨】本研究では、成人した後にアスペルガー症候群であることを知った当事者のライフヒストリーを検討し、社会性の獲得を考察した事例研究である。先行研究がほとんどないものの、このような研究の重要性は今後の特別支援教育にとって重要な分野であると考えられる。本事例は、対人関係に困難さを持ちつつも高い社会性を獲得し、中学校の部活動のコーチをしながら一般就労しているケースである。この当事者との面談の語りと、それをまとめた本人の手記を中心に、ライフステージごとに発達のプロセスをまとめ、アイデンティティの形成と社会性と対人関係を発達の的に分析することで、その獲得過程と成立過程を明らかにした。また適切な環境と必要な段階でのサポートが、彼の社会性を高めたと考えられた。今後の特別支援教育や発達障害者支援のために、同様に発達障害成人期の研究を積み重ねることが重要であると考えられた。

キーワード：成人期軽度発達障害、社会性と対人関係、アイデンティティ（自己同一視）、アスペルガー症候群、ライフステージ

【緒言】

平成17年4月、「発達障害者支援法」が施行された。同法の大きな特徴は、文部科学事務次官、厚生労働事務次官の連名通知で出された点にある。これまでの軽度発達障害をめぐる動きの中で、同法は重要な意味を持つ。従来、軽度発達障害は教育、福祉の中において制度やサービスの狭間の存在であった。しかし、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」（平成15年4月）以降、これまでの教育システムから、軽度発達障害を含む「特別支援教育」へと移行しており、現在、文部科学省および全国の都道府県・政令指定都市教育委員会が諸施策を進めている。一方、厚生労働省においては、「自閉症・発達障害支援センター」（平成14年創設）において、軽度発達障害を念頭に置いた動きがあったが¹⁾、いわゆる教育と福祉を繋ぐものとして「発達障害者支援法」が登場した。同法は部局横断型のネットワークを構築させるものであり²⁾、ライフステージごとに当事者に関わる専門職の専門性を高め、医療、教育、福祉

を有効に利用できるものである。軽度発達障害を取り巻く状況はよくなりつつあるが、その支援や教育は試行錯誤の中にあるのが現状である。

一方、翻訳家のニキ・リンコ氏をはじめとする「大人になって診断された発達障害者」が社会の中で社会性を持って一般就労していたり、仕事を持っていたりする人たちも少なくない。また就労だけではなく結婚している人もおり、一見して良好な社会適応を示すものも多い。このような場合、特別な発達支援や療育を受けることなくなんらかの形で社会性を獲得し適応しているのである。

発達障害当事者のライフヒストリーを紐解くことによって初めて分かる発達障害者の内面世界もある。ニキ氏をはじめとする当事者の手記は、このような内面を著しており、彼らの内面を伺うことに関しては、重要な資料となりうる。また、このような事例のライフステージに沿った発達を分析することで、よりよい発達支援を行うことが可能となる。

社会性の獲得過程を紐解くことは、発達障害児への特別支援教育を含めた生涯発達支援において

¹九州看護福祉大学看護福祉学部 社会福祉学科

重要な意味を持つ。その発達プロセスが時としていわゆる健常児・者と異なることがある。

このような発達障害当事者の成人期を報告した研究は少なく、それらのほとんどは追跡研究であり、何らかの療育を受けたケースである。本研究では、自閉症としての特別な支援を受けることなく、何らかの形で社会適応している成人期の発達障害者の発達過程や社会性の獲得をライフステージごとに分析し、いかに社会適応に至ったかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

一般就労している成人アスペルガー症候群の生育歴を調査し、発達障害特有の特徴や発達のプロセスが、どのライフステージにおいて、どのように行われてきたかを明らかにし、社会的スキルをどのように獲得したかを調査した。なお本研究で扱った事例対象者のエピソードを倫理的配慮から、個人の特定ができないように配慮した。また本論文作成に関しては、当事者の同意を得ている。

1. 対象

一般就労をしているアスペルガー症候群の診断を受けた20代男性Y氏。両親と弟2人の5人家族の長男。15歳で診断を受けたが、本人には診断名を告知されておらず、最近になって親から診断名を告げられた。

2. 方法

面談による聞き取り調査を行った。生育歴を明らかにしながら、Y氏が各ライフステージで経験してきた様々なエピソードを聞き出すことを目的とするが実際の場面では、自由に話ができるフリーディスカッションの形式をとった。なお、心理検査等当事者へのアセスメントは行っていない。

3. 期間

平成17年12月～平成18年1月の約2ヶ月間に計4回の面談を行った。1回の面談時間は約2時間。

4. 結果の分析法

面接では、どの時期にどのような問題を抱え、どのように対処したか、という点を中心に聞き取りを行った。筆者が聞き取りながら簡単な年表を

作成し、どのような時期に、どのような問題を、どのような方法で対処してきたかというエピソードを記入した。最終的にY氏と共同で確認を行った。これには、Y氏が調べてきた母子手帳の記載内容や、Y氏が自ら聞き取りを行った保育園時代の担任の話の内容、2回目と3回目の間にY氏が記した自分の生育史の手記を含めた。これらをライフステージごとにまとめ、特にアスペルガー症候群と関連するエピソードや対人関係などに関する内容を抽出し、まとめた。

【結果】乳児期～幼児期

1歳半健診にて言語の遅れ指摘。初歩9ヶ月。2歳時、階段から飛び降りるなどの遊び。3歳児健診にて言語の遅れを指摘。保育園通園。保育園では自分の食器（皿、箸など）でないと食事をしなかった。不器用さ、新規場面の対応の難しさなどの特徴を持っており、3歳から就学前まで言語の療育を受けた。

数字に対し興味を持ち5歳ごろには簡単な足し算、引き算、割り算、掛け算が可能になった。また好きなテレビ番組を見ていると集中しすぎて、名前を呼ばれても気づかないこともあった。

学童期（小学生）

学童期では成績は常に上位で、学習面で問題を指摘されることはなかった。小学校中学年で転校。それまで周囲から受け入れられていた彼の「個性」は、彼のこの転校を機に、目立つようになった。いじめの対象となることで、自分が周囲とは何か違うという違和感を覚えた。この反動で家庭では弟たちに対する暴力が見られるようになった。高学年になると担任が変わり、おとなしく目立たないように学校生活を送った。興味のある教科には集中力を発揮し知識量も豊富な一方で、苦手な教科には集中が続かない状態もあった。また、ある日の反省会で「悪いことをした人」として1日で17回指摘されたこともあった。

思春期（中学～高校生）

中学時代は、おとなしく目立たない生徒として過ごした。しかし、入学当初はいじめなどもあり保健室登校をした。その後は「学校へ行かないのは悪いこと」という認識で通学を続けた。

部活動でバドミントンをはじめ、いわゆる部活動特有の人間関係である上下関係を経験した。バドミントンの成績はよく、高校からの特待生進学の話ももちあがったが、断った。

高校受験前に不眠症状を訴え、精神科を受診。このとき心理テストを受けた記憶があり（その記憶からウェクスラー式の知能検査と推測される）、IQ140 という検査結果とともにアスペルガー症候群と診断された。高校では3年間はまったく同じメンバーのクラスだった。仲良くなった人とはよくおしゃべりをしていましたが、それ以外の人とは口も利かなかった。学業面ではトップクラスで、与えられた仕事はまじめにこなしていた。

青年期（大学生）

関西の大学に進学し、一人暮らしをはじめた。高校生までの自分を捨て、新しい自分の個性を模索しようとした。入学時より服装を奇抜にしたり、派手なかつらを被ったり、時には女装するなどの「奇行」で大学に通った。しかし、内面が変わるということではないと気づき、その代わりに学内で目立つ人と行動を共にしはじめた。

所属したバドミントンのサークルでは、運営に携わったが、運営方針をめぐる同学年の部員と対立した。一方で、先輩後輩の仲はよかった。しかし、2年生の後半から徐々に生活のリズムを崩しはじめた。

3年になると、学業面での意欲を失い、人間関係もうまくいかず、ストレスがたまり始め、麻雀・パチンコの日々になり、このような状態が1年以上にわたり続いた。

しかし、同じサークルの後輩の女性に人付き合いやサークルの仕事を「無理してないか」と指摘され戸惑う。しばらくしてからこの女性と交際を始めた。生まれて初めて自分のありのままの姿を彼女に話した。その後精神的な安定を取り戻し、生活のリズムも戻り、生活上の問題も解決した。

若い成人期（就労）

大手企業の企画部に配属。仕事に対するやりがいがあったものの、残業が多い仕事であった。社内での人間関係は決して良好ではなく、対人関係において表現の行き違いや誤解を招くなどストレスが大きかった。

このころ再び不眠状態が続くようになった。交際していた女性が事故死するという大きな喪失体験も経験し、自暴自棄の状態だった。このような状態の中、メールや電話でY氏の精神状態の異変に気づいた両親は、仕事をやめ郷里に戻るよう説得した。その結果、最初の就労は1年3ヶ月で退職、帰郷することとなった。

郷里に戻ったY氏は、引きこもり状態が1年間続いた。ある日、中学時代の部活の友人が訪ねてきたのをきっかけに、「自分ができることは何か」と考え、中学生を中心に得意のバドミントンのコーチをボランティアで始めた。ここで相手を「サル型」「イヌ型」「ネコ型」と分け、それぞれのタイプに応じた指導の仕方を行うようになった。その後、地域の若者を対象とした勉強会のサークルに参加するようになりその後、再就職し、経理の仕事に就いた。筆者が講師として発達障害の話をしたのは、このサークルだった。

【考察】

Y氏のこれまでの生育歴は、幼児期の言語療法の経験があるものの、「自閉症」としての療育を受けたものではなかった。現在のY氏の社会適応の状態は、表面的には大きな問題があるようには見えない。しかし「アスペルガー症候群」と診断されており、自閉症としての対人関係の困難さは潜在的にあると考えなければならない。

Y氏は特別な療育を受けることもなく、成長し、大人になってから障害を告知されているが一般就労が可能になっている。Y氏の発達過程の中で、どのように社会適応能力を獲得するに至ったか、ライフステージごとに継時的に考察を進める。

この前段階として、この社会適応能力と大きく関わる自己認知とその変容を分析することが必要となる。他者との関わりを考えた場合、当事者が自分をどのように認識しているかということが重要となるからである。

また、この自己認識に伴う新しい問題として、発達障害者を新しい「中途障害」の形として位置づける意味が生じる。具体的には、軽度発達障害は、その知的能力の高さゆえ、「自分の障害が分

かる障害」である。つまり、周囲の定型発達児・者^{注1)}と自分を比較し、自分が周囲とは異なる存在であることに気づくことを意味する。また、彼らは発達過程のある段階で、自分が「発達障害」であることを知らされる。このような状況は中途障害の障害受容とも異なり、新しい枠組みでの理解が必要だと思われるからである。

発達の中での自己認識の変容

一般には思春期では意識が自分の内面に向かい、自分と向かい合う段階である。この段階において「個性」が強くなり、他者と自己を比較する³⁾。軽度発達障害児の場合、他児との差異を思春期になって感じる人が多い。しかしY氏の場合、この他者との差異を感じた時期は、児童期である。きっかけは小学3年生での転校であった。Y氏によると、転校という環境が一変する大きな「事件」を経験し、ここで周囲の子どもたちと自分が「どこかが違う」という違和感を持ったという。

これが自分に対する周囲の級友の態度が異なるという気づきがきっかけとなっているが、厳密な意味で自分を他者と比較した結果の「違和感」ではないと考えられる。自分に対する級友の反応と、他者に対する級友の反応が異なることに気づいた結果、「どうして自分への反応が異なるのか」という疑問である。この頃のY氏は、違和感があったものの、自己と他者の相違を認識したものではなかった。しかし、いじめやからかいの対象となり、これが他児との「差異」であると気づき、その意味するところは理解不十分であったにも関わらず、対処するきっかけになったのは間違いない。

転校する前の学校は小規模校で、級友は地域の保育園からほぼそのまま就学しており、幼児期のY氏の言動は既に認められていた「個性」として認識されていた。そのため、「Y君はY君だから」と許容されていた可能性がある。しかし、転校後の級友から見れば、Y氏のことば使いや対人関係は、自閉症独特の特徴があり、周囲からすれば、いじめやからかいの対象となりやすいものだったはずである。他の発達障害児が経験するいじめやからかいを、転校後に経験することになった。この結果、これ以降のY氏の対人関係に基本は「目

立たないように立ち居振舞う」という形になっている。しかしこの対人関係を安定して継続していたとは考えられない。それは1日に17回の注意を受けたり、学校のストレスで弟に暴力を振るったりしたエピソードがあるからである。つまりこの時点では、十分な自己認識と行動調整が行えていなかった可能性を示唆している。

ピアジェやエリクソンの発達理論からすると9、10歳以降の発達では理論的操作が可能となり、それまで以上に客観的な自己認識が可能となる。このような場合、他者と自分の差異を知ることとなる⁴⁾。つまり、この段階でのY氏は、自己と他者を比較する段階ではなく、感覚的な違和感を抱いていたと考えられる。つまり、転校という大きな環境の変化がなければ、このような違和感を抱くには時間がかかった可能性が否定できないからである。

この「目立たないようにする」対人関係のスタイルは、高校生になるまで継続することとなった。これは対処的な方法であるが、彼の防衛操作として有効な手段だったと考えられる。中学に進学してからも、不登校までは至らないものの、保健室登校を行い、自己を保つことで必死だった状態が伺える。

一方、中学では部活でバドミントンと出会い、実力が認められることで、学業的な自信のほかに、新たにバドミントンという自己を支える具体的な自信が加わることになる。また高校からのスポーツ特待生の誘いがあったり、中学、高校を通じ優秀な成績を修めたりしたことは自己肯定感を高める一因になったと考えられる。

しかし、思春期、青年期を通して、アイデンティティ（自己同一視）を形成する上で大きな課題になっていたのは、目立たないようにするという対人関係の取り方で身に付いた「自己」である。自己の抑制は成功していたものの、自己を健全に構築する事に関して、この方法は適切ではなかった。そのため大学入学を期に、今までの自分を否定するために女装したりかつらをかぶったりして自己を表現しようとしている。

Y氏が「奇行」とよぶこの一連の行動は、自己否定と自己表現、さらに防衛機制が重複したもの

と考えられる。これまでの自己を自身で否定すると同時に、認められたい自己の表れであるとも見ることできる。「奇行」はすぐに治まるものの、自己表現のスタイルとして奇抜な外見をすれば、最初に自分を「変な人」として周囲に印象付け、その後の言動を気にしなくていい、という思いでもあった。そしてY氏は、期待される「変な人」を演じることで新たな対人関係の取り方を模索したと考えられる。これは明らかに他者視点に立った行動である。つまり自分のことが客観的に分かるというメタ認知がこの発達段階で可能になったことを示すものである。一方で新しい自分を獲得したいという思いもあり、自分が何者であるかというアイデンティティの形成に至るまでのY氏の内面の一時的な混乱の存在が伺える。これは大学のバドミントンサークル内の活動に力を入れ、周囲に認められようとする行動にも見受けられる。また飲み会の席で自分の仕事として「盛り上げ係」と自分を位置づけ、その業務に徹している。これも、自己と他者の関係の中で新しい自分を模索する作業であったと思われる。

高校生までの目立たないように徹してきた対人関係とは一見逆の行動とも思える。このような行動は、自己を抑えた対人行動と考えることができ、自己表現への渴望と諦観を伺うことができる。

宮原は発達障害児の自己評価に関して、「自分はだめだ」という意識が育つと、人生に悲観的な態度になり、自暴自棄になったりうつ状態になったりする可能性を述べている⁵⁾。辻井はアスペルガー症候群等の広汎性発達障害青年の場合、アイデンティティの形成過程や構造自体の違いを指摘する。特に関係性の側面に関して、いろいろな他者へのいくつもの同一化を統合して1つのアイデンティティを形成する場合、統合的な性質のものになりにくくモザイク的なものになるという脆弱さがあるという。また青年期のアイデンティティを支えるものとして、自分の個性を理解し、それを受け入れられることが重要であるとしている⁶⁾。思春期から青年期にかかる時期にアスペルガー症候群の一部は、独自の同一性障害を呈することがあるという。これは他者との比較が可能になり、独自の自己を認識するようになるからである。ま

たこれを防ぐため、杉山らは10歳ごろの自己に悩み始める時期と、世界が急速に広がる高校生初期の15歳で合計2回の障害告知を行っている⁷⁾。Y氏も高校受験直前に不眠状態となり精神科を受診したことからも、思春期、青年期におけるアイデンティティの形成への支援は非常に重要になってくると考える。

Y氏の場合、この自己評価とアイデンティティの形成に関する課題に大きく寄与したのは、大学生時代に交際した女性の存在であったと考える。他者とは異なる異質な存在であり、自己評価も低くなったY氏の存在を肯定し、全て認め、そのままよいという女性の言動が、Y氏のアイデンティティに大きな変化を与えている。Y氏は他者と異なる自分を否定することをやめ、女性が認めるありのままの自分でいいという視点にたどり着き、良好な自己像を築くことに成功している。

「そのままでもいい」という評価を得ることによって良好なアイデンティティを形成することが可能となった。このことは前述した、自己評価への援助の必要性と、その援助の方向性を示している。ここで重要なのは、新しい方向性を示したりなんらかの改善策を講じたりすることではなく、存在そのものを肯定するという支援の方向性である。そしてそれが結果的に良好な自己像の形成につながり、安定した精神状態を保つ重要な要因であることが示唆された。

社会適応と対人関係の課題

自閉症の特徴として、①社会的相互交渉の問題、②コミュニケーションの問題、③固執性という3つがあげられる。また「他者の心情を理解する」という「心の理論」とよばれる課題も、自閉症児・者の大きな障害である。そしてその生活レベルから考えられるのは、これらの特徴は「社会性の課題」であり、「対人関係の課題」と表現することができる。この問題は全ての知的レベルにおける自閉症児・者に共通する障害である。自閉症特有の対人関係の問題を抱えながら、対人関係のスキルをいかに獲得したのかということは、自閉症療育において重要な課題のひとつである。

学童期に転校し、いじめやからかいの対象にな

ったことから、Y氏の対人関係の持ち方は「目立たないように振舞う」というものであった。これは青年期まで継続している。また大学進学直後の「奇行」は、この段階ではメタ認知が可能になったことを示す。つまり思春期のどこかの段階で、この能力を獲得したことが伺われる。

対人関係のスキルについてY氏の自己分析によると、「経験の積み重ね」であるという。出会ってきた人たちの反応からパターン化し、カテゴライズすることによって、相手に合わせるというスキルを獲得したと語っている。

ニキ・リンコ氏の話によれば、過去に質問されたり自分で考えたりした事に関しては、すぐに答えたり返事をしたりすることができる。しかし、そのような経験がない場合は、答えに窮するという。いわば頭の中がデータベースのようになっており、経験が対応のマニュアルとともに蓄積されていると考えられる。実際、記憶力の高いニキ氏やY氏は、教科書などはほとんど頭に記憶されており、これは自閉症独特の記憶の特徴である。これは抽象的、概念的なものでなく、コンピューターのデータのようにそのまま保存される記憶の処理である。1日に17回も悪いことを指摘されたと言う記憶は、このような記憶システムを象徴するものである。定型発達の場合、抽象的、概念的な記憶のメカニズムや記録・保持・想起のプロセスの中で学習が円滑になる。認知の障害を持つ自閉症は、この円滑な学習が困難になる。そのため新規の場面や質問に困難さが現れる⁸⁾。

Y氏のバドミントンのコーチは、相手を3類型にまとめ、それぞれに適した指導の仕方を講じている。このような相手の反応から類型化させる対人関係のとり方は、Y氏の中にある既存の類型化された枠組みの中に相手を当てはめる方法であることが考えられる。飯塚は自閉症者の「共感性」や「心を読む」能力は認知に障害があるために限界があるが、決まったやりとりのパターンでは読み取りは可能になるとしている⁹⁾。決まったパターンとは一定の枠組み（スキーマ）であり、このような枠組みがある場合、理解は容易となる。

自閉症療育における行動療法などは、行動をパターン化することで社会適応に向かわせるもので

ある。パターン化するという事は、自閉症児にとって、どのように振舞えば問題にならないかということであり、構造化するという事は、外部からスキーマに沿った情報を入力する作業といえる。Y氏はこういったスキーマを用いることによって、苦手な対人関係の学習を埋め合わせていると推察される。

一方でY氏は、自分で行動をコントロールしていたと考えられる。いじめやからかいの対象になっていたものの、これを避けるために目立たないように意識的に対処していたものである。この能力は、自閉症児・者において非常に重要となる。例えば積極奇異型と呼ばれる自閉症児・者の社会適応を困難にするのは、その対人関係にある。

ウイングによる自閉症の3類型の1つである積極奇異型は、一般的に知的能力が高い自閉症児・者に多いとされる。このタイプの自閉症者は他者と積極的な関わりを持つとしようとするが、その関わり方が非常に偏った一方通行的な関わり方であり、自分の興味のある事象に関する知識を話し続けたりする¹⁰⁾。このような関わり方が続くと、良好な人間関係を築くことは困難になる。この言動をコントロールすることが自身の力で可能であれば、対人関係の問題は減少する。自閉症児・者が自分の言動をコントロールできるということは、対人関係の問題を少なくすることにつながる。

Y氏の児童期はなんらかの対人関係のトラブルが多く、思春期には少なからずトラブルがあったことは推測されるが、大学入学時には他者視点が獲得されており、トラブルの数は減少したと考えられる。つまり、思春期以降、対人関係に関する枠組みを築いていったことが示唆される。また他者視点の獲得が言動をコントロールする能力に大きく影響していることが考えられる。これは同時期に獲得したと思われるメタ認知能力との関連も大きいと考えられる。

対人関係のスキルについては、このようにスキーマの獲得と自分の言動をコントロールする能力に起因するところが多いと推察される。

また、自閉症の対人関係を困難にする要因のひとつとして考えられているのは、「心の理論」と呼ばれる他者の心情や信念を読み取る力である。

自閉症はこの能力が低いといわれる。しかし高機能自閉症の場合、小学校高学年あたりからなんらかの形で「心の理論」を彼らなりに獲得し、これにより社会的ルールを推し量るのは容易になるが、定型発達者が直感的、自動的に他者の感情を読むこととは違い、異なった方略を用いて行っていると考えられている¹¹⁾。

Y氏も、他者の心情を読み取ることが困難であると語る。Y氏の場合、相手の心情を理解する上で必要な想像力の障害や非言語的コミュニケーションにおいて困難が生じるため、過去の自分の経験の中から、自分の心情を想起し、それを相手に当てはめ、それに応じた言動を取っていると考えられる。現象としては同じ言動であっても、そこへたどり着くためのプロセスが異なっていると思われる。過去の自分の経験とその時の心情というデータがあり、これを利用した他者理解と考えることができる。

このことは、自閉症児・者の対人場面で困難を示した場合、その解決方法をその場で確認することがよりよい対人関係の作り方につながることを示唆している。このような対人関係における支援において重要なことは、自閉症児・者の経験がデータとして蓄積されるかどうかである。その場面ごとの対人関係を構造的に理解し、その時の対応の仕方を意識的に積み重ねさせていくような支援のあり方が重要であると思われる。このような経験的なデータを日常生活の中で意識化させ、それを経験知として蓄積させていくことが支援の課題であることが示唆される。

良好な対人関係は、よりよい社会適応につながる。自閉症児・者個々の能力や対人関係の形の中で、その能力を最大限に引き出す支援が良好な社会適応をもたらす支援につながる。個々の能力と対人関係の持ち方に応じた支援を行うことが必要である。

成人後の障害受容の課題

近年、青年期後期以降に診断を受けるケースが増えてきた。どのような経緯で診断に至ったかという調査はないが、大別すると2つのパターンに分けることができると考える。1つ目は、自分で

発達障害を疑い診断を受けるものであり、2つ目は、うつや神経症などの治療過程で発見されるものである。

前者の場合、発達障害に関する情報を本やインターネットなどであらかじめ調べており、専門家へ相談する形で診断を受けることになる。この場合、発達障害の診断を前提とした受診であるため、心的準備が整っており、大きなトラブルは少ないと考えられ、前述のニキ・リンコ氏はこのケースに当たる¹²⁾。しかし、後者の場合はまったく発達障害の知識を持っておらず、突然の診断に直面する。このようなケースの場合、中途障害と同じ受容プロセスをたどると思われる。そのため主治医や専門家への相談、情報収集などを診断後に行い、受容していくこととなる。中途障害の場合、否定、怒り、取引、抑うつといったプロセスを経て、最終的にはあきらめにも似た形での受容となる¹³⁾。あるADHD当事者は、うつ状態を主訴とし精神科を受診していたが、その治療過程でADHDの可能性を指摘された。彼はその場で激怒し、自分に障害があるということをその場で否定し、主治医と口論になったという。

後者の場合、主治医である精神科医が、発達障害に対する知識をどの程度持っているか、発達障害をきちんと診断できる医者とのつながりを持っているかが、非常に重要となる。日本における現状では、精神科医であっても発達障害に関する知識を持っているものは少なく、理解もあまり進んでおらず問題になっている。そのため、主治医が発達障害に関する知識を持っていなければ、正確な診断を受けることはできない¹⁴⁾。

Y氏の場合は、思春期にアスペルガー症候群であるという診断を受けている。しかし、本人に知らされるのは成人期になってからであり、偶然に知ったという状況である。このようなケースは後者に近い障害告知だと考えられる。Y氏は自分の障害を知ったことで、自身の違和感の原因が分かったと語っている。障害告知を受けショックはなかったかという問いには、「ショックというよりも納得した」と述べた。そのためY氏は、2週間ほどの間に数冊の専門書を読み、自分の障害について知識レベルで理解しようとしている。受容の

過程の否定はなく、むしろ自分の障害を知ること、これまでの自分自身を納得できたというポジティブな反応であったが、行動は防衛機制的補償と考えることもできる。青年期や成人期において自分の障害を知った高機能自閉症者は、おおむね自分の障害を知ることができてよかったと評価する人が多い。自分の生活の困難さの原因が分かったとする理由からである¹⁵⁾。受容過程は個人差があるものの、中途障害者に対する受容と同様に重要視することが必要だと思われる。しかし、身体障害などの中途障害と大きく異なる点は、自分自身が変化したということではなく、診断されたとしても受障などの境目がないことである。しかしある発達障害当事者は、「私の芸風はアスペです」と自己紹介をしており、このように自分の個性として受容し、障害も含め統合された自己の再構築が、新しい中途障害の受容のあり方であることが示唆される。

Y氏の障害受容は始まったばかりであり、今後どのようなプロセスを経るか不明であるが、引き続き相談場面等で対応を行う必要があると思われる。

【結語】 本事例では、成人してから診断名を知ったY氏の生育歴を、アイデンティティの課題、社会的適応と対人関係の課題、受容の課題という3つの方向からライフステージレベルからの分析、検討を行った。本研究ではアイデンティティの形成と対人関係の獲得過程を分け、それぞれの獲得過程の概略を見ることができた。しかし自己は他者との関係性から獲得されるものであり、関係発達臨床的立場からの分析が今後必要だと考えられる。

今回は、発達障害当事者の語りを中心としてまとめたが、この手法は当事者への依存度が高く正確な事実や状況を把握することは困難である。また本人が語らない限り明らかにならない部分もある。しかし、より多く語ったり具体的な表現が多かったりすることに関しては、本人の中で非常に大きな意味を持つ事象であると理解することができる。逆に、本人の意思で語られなかった両親との関係性は、解決されてないものが示唆される結

果となった。一方で手記などを分析対象にする研究より、より操作的に聞きだすことができるこの手法は、限界があるものの有効な手段と考える。

今後、このような事例研究を積み重ね、それぞれの発達障害に関し、発達課題をどのように通過してきたのか、共通点と個人差を明らかにし、生涯発達支援の手がかりにしたいと考える。さらに、本事例を含め、成人期に診断を受けた発達障害者の障害受容過程も今後の課題であり、継続研究が必要である。このような研究は発達障害者のライフステージで、どのような課題が、どの発達段階で、どのような方法や支援により解決するかということをも明らかにする方法として、重要な礎と考える。

【謝辞】

今回の論文執筆にあたり、快く許可をいただき、自らの人生を語り手記を提供してくださったY氏に記して謝する。また、執筆にあたって助言を下さったA先生に記して謝す。

注釈

注1) 「定型発達」という用語は、近年の発達臨床心理、特別支援教育領域などにおいて使用されているものである。「発達障害」と対概念として、「非発達障害＝健常児・者」の意味で用いられる。

【文献】

- 1) 大塚晃. 発達障害者支援法に関して. 発達障害研究. 2005 ; 27 (2) : p. 87-94.
- 2) 柘植雅義. 特別支援教育政策の立場から. 発達障害研究 2005 ; 27 (2) : p. 102-104.
- 3) 村瀬聡美. 第6章 中学生、高校生になって、今まで気になっていたことが実際に問題となった場合はじめに—思春期の発達の様子. 石井道子他. 可能性のある子どもたちの医学と心理学 : 東京 : プレーン出版 ; 2002. p. 171-173.
- 4) 別府 哲. 小学校生活の中で気になることがある場合 1. はじめに—児童期の発達の様子. 石川道子他. 可能性ある子どもたちの医学と心理学 : 東京 :

- ブレーン出版；2002. p. 103-108.
- 5) 宮原資英. 自己評価の問題 1. 総論. 斎藤久子他. 学習障害：東京：ブレーン出版；2000. p. 172-179.
 - 6) 辻井正次. 青年期・成人期の問題——社会参加の問題. 杉山登志郎他. 高機能広汎性発達障害：東京：ブレーン出版；1999. p. 162-169.
 - 7) 杉山登志郎. 問題行動の克服と青年期の社会性の獲得のために. 杉山登志郎他. アスペルガー症候群と高機能自閉症—青年期の社会性のために：東京：学習研究社；2005. p. 6-41.
 - 8) 水野薫. 認知の特徴と高機能自閉症. 内山登紀夫他. 高機能自閉症 アスペルガー症候群入門：東京：中央法規；2002. p. 76-99.
 - 9) 飯塚直美. 社会性とコミュニケーションの障害. 内山登紀夫他. 高機能自閉症 アスペルガー症候群入門：東京：中央法規；2002. p. 100-128.
 - 10) 杉山登志郎. 広汎性発達障害と愛着. 杉山登志郎他. 高機能広汎性発達障害：東京：ブレーン出版；1999. p. 104-106.
 - 11) 杉山登志郎. 発達障害の豊かな世界：東京：日本評論社；2000. p. 116-118.
 - 12) ニキ・リンコ. 自分を語る—普通の変な人を目指そう. 杉山登志郎. アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート：東京：学研；2002. p. 57-66.
 - 13) 後藤秀爾. 子どもの死と向かい合って. 村上英治他. “いのち” ふれあう刻を：東京：川島書房；1994. p. 13-39.
 - 14) 辻井正次. 広汎性発達障害の子どもたち：東京：ブレーン出版；2004. p. 43-44.
 - 15) 猿渡温美、梅永雄二. 成人期に達したLD・ADHD・AS者障害受容に関する一考察—必要なサポート体制の確立に向けて—日本LD学会第11回大会論文集；2002. p. 242-251.

[Study Note]

A Case Study of How an Undiagnosed Asperger Syndrome Adult Achieved Significant Social Success

Muneyuki Mizuma *

*Kyushu University of Nursing and Social Welfare,
Kumamoto 865-0062, Japan*

【Abstract】

The present case study of a man with Asperger Syndrome unaware of his disorder until adulthood analyzes how he attained considerable skills and a measure of social success. There are few studies of such cases, but this is one of the most important fields as Special Support Education will soon be started in Japan. From interviews and written work the subject's process of achieving social success through his life stages was researched and examined. Currently he holds a good job and is a volunteer sports coach. The analysis aims to unravel how he attained occupational skills, and partially overcame his social interaction limitations without specialist social and educational support. The results of the analysis should indicate supports and opportune environments appropriate for Asperger Syndrome individuals. Similar and further studies are required for the improvement of Special Support Education.

Key words : adults with mild disabilities, Asperger Syndrome, social skills, social relations, life stages

* FAX: +81-968-75-1811, E-mil: mizuma@kyushu-ns.ac.jp